

# 用語集

## 1. ICT

ここでは、情報通信技術（Information and Communication Technology）をICTと表現している。

## 2. アセットマネジメント

道路や橋梁などの公共施設について、建設されてから撤去されるまでをトータルに捉え、将来的な損傷・劣化等を予測・把握し、最も費用対効果の高い維持管理を行う考え方。

## 3. IE手法（Industry Engineering）

生産性を向上させるために工程を分析して作業のムリ・ムダ・ムラをなくす科学的な分析・改善の手法のこと。時間研究、動作研究などの伝統的な技法から生産の自動化、コンピュータ制御、情報処理、ネットワークなど様々な工学的手法が含まれる。

## 4. eラーニング

コンピュータネットワークを通じて学修する遠隔授業システムである。学生が理解度に応じて学修を進め、自己診断を行い、その結果について教員の指導を適時受ける学修スタイルで、学修支援システム（LMS）等を用いている。

## 5. インストラクショナルデザイン（Instructional Design）

最適な教育効果をあげるために、学修環境の分析 評価 開発 実施 導入後の評価の5つの手順をサイクルとして教育方法の設計を行う手法である。学習理論、コミュニケーション、情報・メディア技術等を統合することで知識、スキル、態度などの高い学修効果を目指す。

## 6. インダストリアルエンジニアリング（Industrial Engineering）

経営工学を意味する用語であり、経営目的を定め、それらを実現するために、社会環境・自然環境との調和を図りながら、人、物（機械・設備、原材料、補助材料及びエネルギー）、金及び情報を最適に設計し、運用し、統制する工学的な技術・技法の体系。  
(出典：JISZ8141の1103)

## 7. FD（ファカルティ・ディベロップメント）

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催等を挙げることができる。なお、大学設置基準等においては、こうした意味でのFDの実施を各大学に求めているが、単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある。  
(出典：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」平成24年8月 中央教育審議会 用語解説)

## 8. オープンコースウェア

大学の授業やコンテンツの一部をインターネット等を通じて無償で公開する活動であり、米国のマサチューセッツ工科大学が2003年に開始し、世界中の大学で取り組まれている。日本でも東京大学をはじめとする大学が日本オープンコースウェア・コンソーシアム（略称：JOCW）を設立して講義ビデオや関連資料などを公開している。

## 9. オペレーションズ・マネジメント

生産、物流、販売などの経営活動に伴う作業の効果的、効率的の設計と運用を通じて、企業の競争力を向上させ、環境を保全し、社会へ貢献する業務活動。

## 10. オペレーションズ・リサーチ（Operations Research）

現象を抽象化した数理モデルを構築し、モデル分析に基づいて種々の問題、とりわけ意思決定問題の解決を支援する方法論や技法の総称。  
(出典：日本オペレーションズ・リサーチ学会OR用語辞典)

### 11. OSCE (Objective Structured Clinical Examination)

医学生・歯学生が診療参加型臨床実習に進む前に一般診療に関する基本的臨床能力を備えているかを評価を行う客観的臨床能力の実技試験。

### 12. 学識

E・L・ボイヤー（米国）のスカラシップ論で述べられている「発見の学識」、「統合の学識」、「応用の学識」、「教育の学識」の4つの機能で、スカラーとは、優れた研究を行うと同時にその成果をわかりやすく学生に伝えることを任務とする者を意味する。

（参考文献：「学術と社会の将来を見据えた大学教員論の確立を」吉武博通：カレッジマネジメント151/Jul-Aug.2008）

### 13. 学修ポートフォリオ

学生が、学習過程ならびに各種の学習成果（例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など）を長期にわたって収集したものの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的とする。従来への到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。

（出典：「学士課程教育の構築に向けて（答申）」平成20年12月 中央教育審議会 用語解説）

### 14. 学修支援システム

eラーニングシステムの教材・コンテンツの保管・蓄積、配信などを行うとともに、学修履歴や小テスト・ドリル・試験問題の成績などを統合的に管理するシステムで一般的にはLMS (Learning Management System) と呼ばれる。従来はeラーニング、課題の提示、レポート提出等などが主な使われ方であったが、最近は教室内のグループ学修を教室外でもネット上で実施するアクティブ・ラーニングの場として、学習者と教員・ファシリテーター、学生同士がグループ学修を行う掲示板などでコミュニケーション機能を活用する例が多くなってきている。

### 15. ガントチャート

ヘンリー・ガント（米国）が考案した工程管理やプロジェクト管理などで使われる標記方法であり、各作業の開始・終了時期、作業の流れ、進捗状況などが把握しやすく、プロジェクト管理者やメンバーにとって非常に有効な管理手段として利用されている。

### 16. QC7つ道具

品質管理及や品質改善において現象を数値的・定量的に分析するための技法で、以下の7つの手法を言う。（層別、パレート図、特性要因、ヒストグラム、散布図、チェックシート、管理図）

### 17. CAD、CAE、CAM (コンピュータ支援技術)

製品の形状、その他の属性データからモデルをコンピュータの内部に作成して解析・処理することによって進める設計のことで、作成されたモデルを利用して、各種シミュレーション、技術解析など工学的な検討を行い、生産に必要な各種情報を生成すること、及びそれに基づいて進める生産の形式のこと。

（出典：JISB3401）

#### ・CAD

製品の形状、その他の属性データからなるモデルをコンピュータの内部に作成して解析・処理することによって進める設計あるいは、コンピュータによる設計支援ツールのこと。（出典：JISB3401-0102）

#### ・CAE

CADの過程でコンピュータ内部に作成されたモデルを利用して、各種シミュレーション、技術解析など工学的な検討を行うこと。（出典：JISB3401-0105）

#### ・CAM

コンピュータの内部に表現されたモデルに基づいて、生産に必要な各種情報を生成すること、及びそれに基づいて進める生産の形式のこと。（出典：JISB3401-0103）

## 18. クリッカー

学生一人一人が手のひらサイズのリモコンを持ち、講義中に出される質問に対してリモコンの番号を押して回答するシステムで、学生の回答は瞬時に集計され、結果がグラフ等でスクリーンに映し出される。講義者と学修者の双方向コミュニケーションを可能にするツールの一つであり、学生の集中力を保つとともに、学生の理解度をその場で把握して授業に反映することができ、授業の質を高めるうえで効果的な方法の一つとされている。

(出典：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」平成24年8月 中央教育審議会 用語解説）

## 19. KJ法

文化人類学者の川喜田二郎氏が大量で雑多な資料をまとめる方法として開発した方法であり、雑然としたデータをカードや付箋などに要約し、数多くのカードの中から類似のグループに統合することで構造を読み取り、とりまとめていく方法。漠然とした問題やアイデア等を明確にし、新しい解決策や発想を得るための方法として用いられることが多い。チームワークで問題解決を図るのに効果的な方法として共同作業や合意形成などにも使われる。

## 20. 3次元オブジェクトCAD

建築形態や空間を、コンピュータ上で、大きさ・重さ・色など性質の属性情報と振る舞い・操作などの機能情報を持たせた3Dデジタルモデルとして構築するデジタルCADツール。すべての構成部位をレイヤー・クラスによってパラメトリックにプラットフォーム（基盤となるデータベース）としてデジタル管理できるため、様々な解析シミュレーションなどに展開し利活用が可能である。建築設計教育分野においては、デザインプロセスの見える化、諸環境における形態・空間の最適化、各種建築技術の融合を前提とした協働設計を可能にする。

## 21. シラバス（授業計画）

各授業科目の詳細な授業計画。一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が書く授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる。アメリカでは、教員と学生の契約書とされている例もある。授業内容の概要を総覧する資料（いわゆるコース・カタログ）とは異なり、科目の到達目標や学生の学修内容、準備学修の内容、成績評価の方法・基準の明示が求められる。

(出典：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」平成24年8月 中央教育審議会 用語解説）

## 22. セルフメディケーション

「自分自身で健康を管理し、あるいは疾病を治療すること。自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」とWHO（世界保健機関）で定義されている。

## 23. 大学改革実行プラン

平成24年6月に文部科学省が行動計画として公表したプランで、日本が直面する課題や将来想定される状況をもとに、激しく変化する社会における大学の機能の再構築と大学の機能の再構築のための大学ガバナンスの充実・強化の方向性をとりまとめ、社会を変革するエンジンとしての大学の役割が国民に実感できることを目指して取り組むことを求めている。

## 24. チーム・ベースド・ラーニング(TBL)

学んだ知識を実際に使う演習を通じてグループで協働して考え、主体的に学ぶ学修形態のこと。具体的には医学教育などで「身につけた知識」を用いて患者の立場で「考え」、「何が必要」で、「どういう選択をしたらいいのか」といったことをチームでディスカッションし、グループ内での発言で根拠などをしっかりと述べ、他の人の意見を聞くことで、自分の考えを振り返り、自分達で問題を発見し、解決策を見出していく。

## 25. ティーチング・ポートフォリオ

大学等の教員が自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を、目に見える形で自分及び第三者に伝えるために効率的・効果的に記録に残そうとする「教育業績ファイル」、もしくはそれを作成するに際しての技術や概念及び場合によっては運動を意味している。ティーチング・ポートフォリオの導入により、将来の授業の向上と改善、証拠の提示による教育活動の正当な評価、優れた熱心な指導の共有などの効果が認められる。

(出典：「学士課程教育の構築に向けて(答申)」平成20年12月 中央教育審議会 用語解説)

## 26. ディプロマ・ポリシー

大学としての卒業認定・学位授与に関する方針のこと。大学の個性化・特色化を推進していく上で、個々の大学が、学生の視点に立って策定しているディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確にし、それらを相互に関連付けて運用していくことが重要である。

## 27. ナンバリング

ナンバリング、あるいはコース・ナンバリング。授業科目に適切な番号を付し分類することで、学習の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する仕組み。大学内における授業科目の分類、複数大学間での授業科目の共通分類という二つの意味を持つ。対象とするレベル(学年等)や学問の分類を示すことは、学生が適切な授業科目を選択する助けとなる。また、科目同士の整理・統合と連携により教員が個々の科目の充実に注力できるといった効果も期待できる

(出典：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」平成24年8月 中央教育審議会 用語解説)

## 28. ピア・レビュー

一般的には学術論文の査読等で用いられる研究者や専門家の評価・検証で用いられるが、ここでは学生又はグループの学修成果を対面やネット上で発表し相互評価することで振り返りや発展的な学修に結びつけることを想定している。

## 29. ピア・インストラクション

ハーバード大学のマズール教授が開発した授業方法で、問題を提示し、理解の具合をクリッカーなどで即座にフィードバックし、異なる考えや理解を持つ他の学生と議論をさせる学生同士のピア・コミュニケーションを通じて問題解決に取り組ませるアクティブ・ラーニング型の授業法である。

## 30. BIM

従来の2次元図面から3次元へと立ち上げていく建築手法ではなく、実際の建築が作られるようにコンピュータ上で3次元に組み上げ統合する手法である。3次元オブジェクトCADによって、建築や空間の形状情報に素材や名称、寸法などの属性情報を持たせた建築データベースとしての3次元デジタルモデル(プラットフォーム)を構築する。このプラットフォームを中心に形態・空間・構造・設備の統合、各種の環境解析や景観シミュレーション、施工・生産プロセスの合理化計画など全工程における建築情報の一元的管理を行い、包括的な問題解決を図ろうとするものである。その他、施主(ユーザー)・設計者・施工者間の情報共有や他分野との連携、クラウドコンピューティングなどによって自然環境における最適化、見える化そして社会における説明責任を果たす手法として期待される。

## 31. プロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)

主としてグループで具体的な課題について洞察、観察、対話、交渉、反省、学修の再構築を行いながら体験を通じて問題解決能力を身につける学修方法である。

## 32. ファシリテーター

ここでは、対面やネット上で学生の理解度や状況を見ながら、学生目線で自らの学修体験を基に実際の学修プログラムの進行を支援していく大学院生、上級学年生をファシリテーター(学修促進者)と位置付けている。ファシリテーターの支援によって、学生の本質的な学びが促進されるとともに、ファシリテーター自身が自らの学びの体験を学生に伝達することを通じて自らの振り返りを行い、自らを次のステップへと、結びつけることが可能になる。学内雇用制度などの整備充実が望まれる。

### 33. プラットフォーム

ここでは、教員が連携して教育改善に取り組むためのネットワーク上の情報基盤環境を想定している。プラットフォーム上では学内の教員間及び学外教員や社会との意見交流、学修情報の共有、教材開発、教材コンテンツの相互利用などを行うことを想定している。

### 34. VR (Virtual Reality)

現実感を伴った仮想的な世界をコンピュータで作り出す技術で仮想現実のこと。(出典：JISB0185-250200)

### 35. 平成22年度私立大学教員の授業改善白書

本協会が、社会の信頼にこたえ得る大学教育を目指して3年ごとに実施している「私立大学教員の授業改善調査」の結果をとりまとめた報告書である。調査は「現状の授業の課題認識」、「授業改善の考え方」、「大学または大学を超えて取り組むべき課題」、「授業での情報通信技術(ICT)の使用状況と効果及び課題」などについて行い、平成22年度は426大学・短期大学の教員2万2千名が回答している。白書の概要は付録「私立大学教員の授業改善白書」を参照されたい。

### 36. ベネフィット・リスクアセスメント

リスク管理手法の一つである。機械・システムが社会にもたらす利益と、ヒト、モノ及びび環境へのリスクとのバランスを様々な観点から考え、点検・評価することを想定している。

### 37. ポータルサイト

Webへアクセスする際に、各種サービスやコンテンツなどへ案内する役割を持ったWebサイトのことである。ユーザーがWeb上で必要とする機能やサービス、コンテンツ、各種サイトへのリンクなどを総合的に案内する玄関の機能を果たすもの。

### 38. マインドマップ、クラウドマインドマップ

頭の中で考えていることを「見える化」することで、思考空間を広げ物事を多面的に見ることにより解決策を見つけ出すための手法である。表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを中央に置き、そこから放射状にキーワードやイメージを広げ、つなげていくことで思考を整理し、発想を豊かにし複雑な概念をコンパクトに表現でき、非常に早く理解できるとされている。また、クラウドマインドマップは、クラウド環境を用いてネット上でアイデアを出し合い、マインドマップで表現して課題解決を図る取り組み。

### 39. マイクロティーチング

教授法のスキルアップを図るための研修方法である。参加者が小規模なグループに分かれて教員と学生の役割を交替しながら短時間の模擬講義を行い、講義を収録したビデオを見ながら相互評価を行い学生の視点に立った講義を点検・評価する。

### 40. レスポンス・アナライザー

レスポンス・アナライザー、オーディエンス・レスポンス・システム等とも呼ばれ、講義中の学生の理解度を把握しながら授業を効率よく進めるための授業支援ツールの一つであり、回答端末のボタンを押すと、回答結果が集計されてリアルタイムにパソコンの画面上に表示されるシステム。クリッカーとほぼ同様な機能を持っている。

### 41. ロールモデル

行動や技術、考え方など模範となる人物のことを言う。優れた人の行動をまねて実践することにより行動の根拠を理解し、行動パターンを身に付けていくことで成長に大きな効果があるとされている。

\*用語は50音順に記載しています。